Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

～異文化理解教育の先駆者たち～

第11回　大谷みどり　島根大学 教授

異文化の学びを教育に還元する

昭和59（1984）年5月、佐野学園では神田外語大学の開学に向け、異文化コミュニケーション研究所を設立しました。当時はまだ認知されていなかった異文化コミュニケーションを啓蒙し、教育と研究の素地を育むための活動を展開していきます。設立間もない研究所に参画した島根大学の大谷みどり教授に「日本初の異文化コミュニケーションの研究所」で過ごした日々についてお聞きしました。

高校生のとき、テレビ番組の『兼高かおる 世界の旅』が大好きで、私も世界中の人々と話から聞ける職業に就ければと漠然と考えていました。外国語を駆使すれば、いろいろな人に出会える。第一志望は大阪外国語大学（※1）でした。でも、一番尊敬していた英語の先生から「女性が仕事をしたいのなら、医者か、教師か、薬剤師」と言われました。大阪の豊中市で育ったのですが、京都の街に憧れていたので、京都大学の薬学部に進学しました。昭和50（1975）年4月のことです。

学生時代、芸術文化社という小さな出版社でアルバイトをしていました。茶道の薫りを漂わせながら、主に伝統工芸士と京都で仕事をしている外国人を紹介する雑誌『グラフィック茶道』の編集を手伝っていました。京都の街や伝統文化を知りたくて、外国人にも会いたい私には願ったり、かなったりの仕事でした。薬学部を卒業しても、製薬会社には就職せずに、そのままこの出版社で働き始めました。

伝統工芸士の方々は、陶芸や装束、染織など、何十年もその道を究めている。取材をお願いしても、人間関係ができていないと受けてくださらない方々が多くいらっしゃいました。誠意を見せようと、工房やお店に足しげく通いました。何度も訪れるうちに、少しずつお話を聞けるようになり、そのうちに「取材してもいいよ」と言っていただけるようになりました。

一方、外国の方への取材では依頼の時点で、「何が聞きたいの？ 目的は？ どんな雑誌に書くの？ アポを取ってから来て」と言われました。とてもロジカルで、ビジネスライク。伝統工芸士の方への取材とはまったく進め方が違いました。

まったく異なるふたつのグループに出会い、価値観の相違に驚かされました。私は「あ、外国語だけでなく、こういった価値観の違いも学びたいんだ」と自分自身の関心に気付いたのです。思えば、それこそが「異文化コミュニケーション」だったのですが、当時はその言葉すらありませんでした。

とにかく飛び込んで、行った先で考えようというのが私の性分です。昭和57（1982）年9月、26歳の私はアメリカに留学をしました。（1/11）

1. 現在の大阪大学外国語学部。平成19（2007）年10月に統合。

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第11回　大谷みどり　島根大学教授

異文化の学びを教育に還元する

～異文化理解教育の先駆者たち～

初めてのアメリカ留学で出会った異文化コミュニケーションという学問

留学先のウィスコンシン大学スペリオール校はとても小さな大学でした。そこを選んだのは、「日本人はこぢんまりした環境の方がよい」と留学のあっせん会社に助言されたからです。現地ではコミュニケーションアート学研究科の修士課程でコミュニケーション学の基礎などを学びました。

でも、とにかくキャンパスも街もこぢんまりしていて、物足りなさを感じた私は、多様性を求めて、ミネソタ大学（ツインシティー校）に転学しました。ミシシッピ川を挟んでキャンパスが広がる全米でも有数の大規模な大学です。図書館も大きく、学部もたくさんあり、多くの著名な先生方がいらっしゃいました。

転学した当初は、マスコミュニケーション学部の大学院に在籍していました。議会に行って取材して記事を書く機会も多かったのですが、私は別に記者になりたいわけではありません。じゃあ、何がしたいのかと探しているとスピーチ・コミュニケーション学部があることを知ったのです。

スピーチ・コミュニケーション学部はいくつかの専門で構成されています。パブリック・コミュニケーション、インターパーソナル・コミュニケーション、グループ・コミュニケーション、組織コミュニケーション、そして異文化コミュニケーションです。

この異文化コミュニケーションの専門領域にウィリアム・ハウエル先生がいらっしゃいました。私は何も知らずに転学したのですが、ミネソタ大学のスピーチ・コミュニケーション学部は異文化コミュニケーションの分野では全米でも草分け的な存在で、かつトップクラスだったのです。

ハウエル先生が作った授業に「異文化コミュニケーション・ワークショップ（Intercultural Communication Workshop）」がありました。10人でひとつのグループを作るのですが、5人アメリカ人で、5人が非アメリカ人です。ジェンダーや貧困などのテーマについて議論するのですが、意見が違うので白熱した議論になります。それがすごく面白かった。

異文化コミュニケーション・ワークショップではふたりの学生がファシリテーターになります。ひとりはアメリカ人で、もうひとりが非アメリカ人。私がファシリテーターを務めたときのテーマはジェンダーについて。ペアを組んだアメリカ人が比較的年配の男性だったので少し安心しました。（2/11）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第11回　大谷みどり　島根大学教授

異文化の学びを教育に還元する

～異文化理解教育の先駆者たち～

あえて“devil's advocate”になり
反対意見で議論を活性化する手法に出合う

議論が始まると、予想通り「男女は平等であるべきだ」という意見が多い。するとアメリカ人のファシリテーターが「そんなことはない。男性の方が優位に立つべきだ」と言い放ったのです。みんな彼の意見にかみ付いて、侃々諤々の議論になってしまいました。

授業が終わり、私はみんなに「ひどい議論になって、ごめんね」と謝りました。すると、クラスメイトたちは「こんなに楽しかったのに、ミドリはなぜ謝るんだ？」と不思議がります。そして、アメリカ人のファシリテーターは「僕も男女平等を大切に思っている。でも、みんな同じ意見だとつまらない。だから僕は“devil's advocate”になったんだ」と言うのです。

わざわざ悪魔（devil）を推奨（advocate）する。あえて反対意見を言って議論を活性化させる。ファシリテーターにはそんな役割もあり、議論にはこういう方法論もあるのだと学びました。日本だと穏やかな議論になりがちですからね。

授業のほかにも、日本語の授業のティーチング・アシスタントの仕事や日本のことを幼稚園や学校、地域の老人ホームなどで話す「インターナショナル・スピーカーズ・ビューロー（International Speakers' Bureau）」のボランティアなども経験しました。日本のことを語り、教えることで学べたことも数多くありました。最初のアメリカ留学は、とにかくコミュニケーションの違いを実感する日々でした。

昭和60（1985）年8月、日本に帰国しました。修士課程の授業は全て単位を取得したのですが、修士論文は日米のパーソナル・コミュニケーションの比較をテーマにしたので、日本で資料を集めたいと考え、帰国してから完成させることにしました。

一方で、異文化コミュニケーションの学びを生かした仕事を日本でできないかと思っていました。帰国前、ハウエル先生をはじめ、先生方が「ミドリ、日本に帰ったら、ドクター久米に会いなさい」とおっしゃるのです。久米昭元先生（※2）は、後に神田外語大学異文化コミュニケーション研究所の副所長を務められる方ですが、昭和50（1975）年からハウエル先生に師事されていたのです。（3/11）

2. 久米昭元（くめてるゆき）：元・神田外語大学英米語学科教授／異文化コミュニケーション研究所副所長、元・立教大学異文化コミュニケーション学部教授。
   » 『かつてない活動を展開し続けた異文研』

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第11回　大谷みどり　島根大学教授

異文化の学びを教育に還元する

～異文化理解教育の先駆者たち～

「研究」「教育」「啓蒙」の活動を展開する異文研の研究員に

日本に帰国した私は、神戸市外国語大学で助教授を務められていた久米先生を訪ねました。異文化コミュニケーションを生かして仕事をしたいと伝えたところ、久米先生は「僕は今すぐ何か紹介できないけど、東京の神田外語学院に古田暁先生（※3）がいらっしゃる。神田外語は異文化コミュニケーションに力を入れていくようだから情報をお持ちでしょう。話を聞いてみてはいかがですか」と助言してくださったのです。

そこで、私は古田先生に会いに、東京の神田へと出かけました。神田外語学院の本館から数ブロック離れた電建ビルの一室に「異文化コミュニケーション研究所」があり、古田先生はその一室で、おひとりで仕事をされていました。古田先生は神学者らしい厳かな印象でした。前職では、“Kodansha Encyclopedia of Japan（『英文日本大百科事典』）”の編集主査を務められたと聞きましたが、膨大な編集の激務をこなす編集者とは思えない、物静かで、神々しい印象がありました。

私がアメリカで異文化コミュニケーションを学び、それを生かして仕事をしたいとお伝えすると、古田先生は「神田外語はこれから異文化コミュニケーションに力を入れます。来年度には大学も開学します。スタッフが必要なので、よかったらここで仕事をしませんか？」とその場でおっしゃってくださったのです。私は実際に何をやるかもよく理解せずに、「私でよかったら手伝わせてください！」と二つ返事でお引き受けしました。昭和61（1986）年5月、私は異文化コミュニケーション研究所（以下、異文研）で研究員として勤め始めました。

異文研は、異文化コミュニケーションの「研究」「教育」「啓蒙」という三本の柱を打ち出していました。佐野隆治理事長（※4）は、「神田外語は異文化コミュニケーションを大事にしたい」とおっしゃっていて、啓蒙活動をスタートしました。古田先生の人脈で講師をお呼びして、月例で「異文化コミュニケーション講演会」を開催し始めていたのです。会場は神田外語学院本館の大講堂。第1回は1985（昭和60）年12月、講演者はドナルド・キーン先生でした。（4/11）

3. 久米昭元（くめてるゆき）：古田暁（ふるたぎょう）：神田外語大学名誉教授、異文化コミュニケーション研究所（現・グローバル・コミュニケーション研究所）初代所長。平成25（2013）年4月永眠。享年84歳
   »『異文化コミュニケーションの夜明け』
4. 佐野隆治（さのりゅうじ）：昭和63（1988）年に学校法人佐野学園の第3代理事長に就任。平成22（2010）年、会長に就任。平成29（2017）年3月永眠。享年82歳。
   »『大学生の本気を引き出す環境づくり』

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第11回　大谷みどり　島根大学教授

異文化の学びを教育に還元する

～異文化理解教育の先駆者たち～

「神田外語は異文化コミュニケーション」月例の講演会とラジオ番組でブランディング

講演会の企画では、まず古田先生が講演者を選び、依頼をして、お引き受けいただくと、「みどりさん、決めてきましたから、後はよろしく」と私に連絡先を渡されました。内村剛介先生、ピーター・ミルワード先生など一流の研究者ばかりです（※5）。私が事務的な調整を行い、講演会当日は古田先生が講師の方の紹介とテーマに関する解説をされました。第一線で活躍されている先生方とコンタクトを取らせていただき、本当に勉強になりました。

文化放送ではラジオ番組『異文化見聞録 コロンブスのゆで卵』もスタートしました。講演会はアカデミックな啓蒙活動でしたが、マスコミを通じて一般に「神田外語は異文化コミュニケーション」というブランドを広めたいという佐野隆治理事長の考えから生まれた番組です。監修は日本文化研究の第一人者であり、ハーバード大学でも教壇に立たれた板坂元先生です。

番組ではエピソードを大切にしていて、日本人と外国人が一緒になったときに、どんなことが起きるかを紹介していました。毎週、異なるエピソードを紹介して、異文化コミュニケーションの実践的な知識を紹介していたのです。板坂先生の指示で制作会社が台本を作り、監修を経て、実制作に入ります。異文研も制作メンバーの一員だったので、私も企画会議に参加していました。

佐野隆治理事長はとてもエネルギッシュで、アイデアにあふれていた方でした。古田先生がお持ちの知識や人脈に耳を傾けながら、神田外語に必要な実践を次々とかたちにしていかれました。古田先生は研究者であり、佐野隆治理事長は神田外語グループを背負ってビジネスをされる方です。立場の違いはありながらも、共通項を認め合い、尊重し合いながらプロジェクトが進んでいったように思います。

私が神田外語学院にいた昭和61（1986）年は大学設置の大詰めの時期です。山本和男さんが大学設置準備室長を務め、久保谷富美男さん、北原賢三さんの3人が文部省との折衝にあたっていました。古田先生は大学の一般教養の先生方を集め、どのようなカリキュラムを構築するかに情熱を注いでいらっしゃいました。（5/11）

5. 異文化コミュニケーション講演会：国内の研究者に加え、アメリカの研究者やビジネスの現場で異文化コミュニケーションを実践するエキスパートたちが講演を行った。
   » 異文化コミュニケーション講演会

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第11回　大谷みどり　島根大学教授

異文化の学びを教育に還元する

～異文化理解教育の先駆者たち～

学外の研究者にも開かれた場を目指した異文化コミュニケーション研究所

大学が開学すると、異文研もそちらに移ることが決まっていました。古田先生は「大学の研究所になるのだから、図書を充実させましょう」と指示されました。異文化コミュニケーションや国際交流の専門書はもちろん、古田先生の専門である宗教や哲学、そして日本文化に関する蔵書のリストを作成し、書籍の発注準備を始めました。

古田先生は「開かれた研究所」をイメージし、学外の研究者が訪れても存分に学べる環境を整えることを目指されていたのだと思います。古田先生は、「ここは日本で初めての異文化コミュニケーションの研究所です」とよくおっしゃっていました。

私は異文研で働きながら、アメリカから持ち帰ってきた修士論文を執筆していました。テーマは日本とアメリカにおけるパーソナル・コミュニケーションの比較です。日本の文献は、当時、先進的に異文化コミュニケーションの研究をされていた南山大学の岡部朗一先生や大妻女子大学の石井敏先生、そして久米先生の論文を引用させていただきました。

そういった先生方に実際にお会いする機会がありました。異文研では、異文化コミュニケーションの授業で使える学術書の出版の準備を進めていました。教育の領域です。昭和62（1987）年3月に出版された『異文化コミュニケーション 新・国際人への条件』（有斐閣）です。

出版準備の会議は異文研の事務所で行われ、古田先生のもとに、岡部先生、石井先生、久米先生が集まり、内容や章立てについて議論をされていました。日本における異文化コミュニケーション教育のリーダーたちが議論をされている現場で同じ空気を吸えたことは私にとって貴重な体験になりました。

岡部先生、石井先生、久米先生はアメリカでスピーチ・コミュニケーションの勉強をされてこられたので、それを踏まえて、「日本での異文化コミュニケーションはどうあるべきか」を真剣に考えられていました。古田先生は少し立場が違い、神学や哲学を大事にされていました。もちろん意見の違いはありましたが、それぞれが互いの立場を大切にしながら、議論をされていました。

異文研で仕事をしながら、私は神田外語学院で「異文化コミュニケーション」の授業を担当しました。日本で教壇に立った初めての授業です。アメリカで学んできたことを、神田外語学院の学生たちに分かりやすく伝えるにはどうすればよいか。その視点で授業を構成しました。学院の学生は外国に関心があり、外国語を学ぶ意欲にあふれています。理論を交えながら、実践的なことを、事例を挙げて教えていきました。（6/11）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

～異文化理解教育の先駆者たち～

第11回 大谷みどり 島根大学教授
異文化の学びを教育に還元する

大学へ拠点を移した異文研
ニュースレターと紀要を刊行

神田外語学院での異文化コミュニケーションの授業では、今でも忘れられないことがあります。私の異文化の経験はアメリカだけです。他の文化を教えるときは文献に頼っていました。

中近東の文化を教えたときに、「アラビアの人はアイコンタクトをとても大切にしています。しっかりと目を見るように」と学生に話しました。すると次の授業で、ある女子学生が「先生、帰りの電車でアラビア系の男性がいたので、しっかり目を見たら、ずっとついて来られて大変でした」と言うのです。よく調べたら、女性が男性の目を見るのはよくなかったのです。大ごとにはなりませんでしたが、異文化コミュニケーションを教える難しさを体験する機会になりました。

昭和62（1987）年4月、千葉・幕張に神田外語大学が開学しました。当時は周辺に大きな建物がなく、幕張本郷の駅から大学の校舎が見えていたのを覚えています。私も真新しい建物にできた「神田外語大学異文化コミュニケーション研究所」に通い始めました。大学が開学しても、数年間は神田外語学院での講演会は継続して行っていました。

大学に移って、古田先生はニュースレターと紀要を発行する計画を打ち出されました。ニュースレター『異文化コミュニケーション』の創刊は昭和63（1988）年4月。異文化コミュニケーション研究の情報を掲載し、年4回出版しました。特徴的だったのが発送先です。全国の大学はもちろんですが、企業で異文化適応のトレーニングをする部署、民間の研究所にも送付していました。広く啓蒙したいというお考えだったのでしょう（※6）。

論文集である紀要『異文化コミュニケーション研究』の創刊は平成元（1989）年3月です。紀要には古田先生はじめ神田外語大学の先生方だけでなく、他大学の先生方の論文も掲載されました。そのおひとりに上原麻子先生がいます。当時、広島大学の助教授を務められていたのですが、私がミネソタ大学の修士課程にいたときに、博士課程に留学されていました。博士課程では、後に紀要に寄稿された慶應義塾大学の手塚千鶴子先生も学んでおられました。当時のご縁が異文研でふたたびつながったのはうれしかったですね（※7）。（7/11）

6. ニュースレター『異文化コミュニケーション』：研究者たちから寄せられた小論文やオピニオンを掲載するとともに、この分野に関するイベントなどの最新情報を紹介した。
   » ニュースレター『異文化コミュニケーション』
7. 『異文化コミュニケーション研究』：他大学の複数の研究者からなる編集委員会と査読委員を設け、内容重視の公正な基準で掲載論文を選出。国内外の若い研究者にも門戸を開いた。
   » 紀要『異文化コミュニケーション研究』

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第11回　大谷みどり　島根大学教授
異文化の学びを教育に還元する
～異文化理解教育の先駆者たち～

日本には日本の異文化コミュニケーションの研究や教育の在り方があるはずです

紀要が発行された時期、私は異文研を退職し、2度目の留学のためアメリカに渡りました。研究者である夫がワシントンD.C.の研究機関に留学することになり、私も現地で博士課程を学ぶ決意をしたのです。

古田先生は、国際基督教大学のエドワード・スチュワート先生ととても親しくされていました。異文研の活動にも尽力された方です。スチュワート先生は私に「ミドリ、D.C.に行ったら、ゲーリー・ウィーバーに会いなさい」とおっしゃりました。

ウィーバー先生は異文化コミュニケーション研究の巨匠のひとりで、「コントラスト・アメリカン」という教育手法の大家です。コントラスト・アメリカンは、価値観や行動パターンなどについて、アメリカ人との「コントラスト」をつけながら教えるという手法。ひとつの事象に対してアメリカ人と他文化の人がどのような反応の違いを見せるかを学びます。

思えば、ミネソタ大学のハウエル先生、久米先生、古田先生、スチュワート先生、そしてウィーバー先生へとご縁をいただきながら、私は異文化コミュニケーションを学び続けることができました。

アメリカへふたたび留学することが決まったとき、古田先生や久米先生と一緒に異文化コミュニケーションの書籍を出版された石井敏先生から、「アメリカで異文化コミュニケーションを学ぶのはよいことです。でも、日本には日本の異文化コミュニケーションの研究や教育の在り方があるはずです。アメリカにかぶれてはいけません」と助言していただきました。とてもありがたい言葉でした。

平成元（1989）年8月、私はアメリカン大学で学び始めました。当初はSIS（School of International Service）のウィーバー先生のもとで異文化コミュニケーションを学びました。SISは国際関係論だけでなく幅広い領域の国際的なサービスを網羅していたのですが、ワシントンD.C.という土地柄、政治経済の色合いが濃く、違和感を感じていました。もっと文化的な側面にフォーカスしたいと考え、文化人類学部に移りましたが、引き続きウィーバー先生の指導のもと、異文化コミュニケーションの博士課程の学びを続けました。

研究者として留学する夫への同行という立場でしたので、アメリカで働くことのできるビザを取得できました。ワシントンD.C.は小さな街ですが、アメリカの首都なので異文化適応のトレーニング機関が数多くありました。私はメリーランド大学の米国大西洋岸中部地区日本教育センターで国際理解教育コンサルタントの職を得ました。日本の小・中学校や高校の教員がアメリカで研修や視察をする際のオリエンテーションなどを担当しました。（8/11）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

～異文化理解教育の先駆者たち～

第11回 大谷みどり 島根大学教授
異文化の学びを教育に還元する

３度目の留学は子どもの教育を通じて異文化コミュニケーションを学ぶ

仕事のひとつに、語学指導等を行う外国青年招致事業である「JETプログラム」で日本に派遣されるALT（外国語指導助手）の出発前のオリエンテーションがありました。

数日間にわたるオリエンテーションで、昼食に幕の内弁当が出されたときのことです。ALTのなかには、箸の使い方やお弁当の食べ方が分からないアメリカ人の若者もいました。こういったアメリカ人が日本でどうやって文化に適応していくのかが心配になり、一方で関心も湧いたのです。そこで、博士論文のテーマを「ALTの異文化適応」に定めました。

平成5（1993）年9月、夫の留学期間が終了し、日本へ一時帰国しました。博士課程の単位は全て取得しましたが、博士論文は完成していません。帰国後は、夫の勤務地に伴い、生活の拠点を島根に移しました。県の国際交流センターからお声掛けいただき、ALTとの接点もでき、インタビューを重ねながら博士論文の資料を蓄積していきました。

どうしても博士論文を完成させたい。その思いから3度目の留学を決意します。当時、小学校に入学したばかりの娘と保育園児の息子を連れて、平成10（1998）年９月、ふたたびアメリカン大学に留学しました。

3度目の留学は我が子の教育を通じて異文化コミュニケーションを学ぶ機会になりました。小学校に上がったばかりの娘をサポートするために、支援のボランティアで授業に参加し、娘だけでなく、他の国籍の児童たちの支援も行うことになったのです。

また、授業で先生が児童たちに意見を求め、児童たちが次々と発言していく様子を目の当たりにしながら、議論で活発に発言をするアメリカ人のコミュニケーション能力がどのように育まれるかも理解できました。結局、子連れ留学は6年間に及び、平成16（2004）年8月に博士号を取得しました。

帰国後は島根県出雲市で暮らし始め、地域の英語教育に関わるようになりました。平成18（2006）年7月、島根大学の教育学部で教え始めました。当時、文部科学省が英語教育におけるコミュニケーションの重要性をうたい始めたことで、教育学部からお声掛けいただきました。

小学校に英語教育が導入されること、そして、異なる背景を持つ人々とのコミュニケーションが大切になるという点で、異文化コミュニケーションを専門領域とする私にもできることがあると思い、教育学部での教員の仕事をお引き受けしました。（9/11）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

～異文化理解教育の先駆者たち～

第11回　大谷みどり　島根大学教授

異文化の学びを教育に還元する

多文化共生社会が進む今、学校の現場で求められる異文化理解

教育学部の教員になったものの、私には教育学のバックグラウンドはありません。そこで、地域の学校の先生方と数多くお会いし、何が必要かをヒアリングしました。そこで分かってきたのが、小学校の英語教育で不安を感じている先生方がいらっしゃること、そして中学や高校の先生でも今まで通りに教えてもうまくいかないと感じている先生方がいらっしゃることでした。「私も素人ですが、一緒に勉強していきましょう」と、ふたつの勉強会を立ち上げました。

ある特定の学習が苦手な児童や生徒がいます。自閉症と診断されれば、特別支援学級でも学べますが、学習障害だと基本は通常学級での学習になります。でも、明らかに苦手の原因がある。英語だと、話すのは上手だけど、文字を介すと途端に読めなくなってしまったり、アルファベットをうまく書けない生徒たちがいます。そういった生徒たちが増えているなかで、どうしたらよいか先生方は悩んでいらっしゃるのです。

英語は他の科目と比べてコミュニケーションが大切にされます。他の教科は学ぶのが難しいけれど、英語だとたくさん話して先生に褒められる。特別支援学級にいて、英語の時間だけ通常の学級で授業を受ける児童がいる一方で、通常の学級にいるけれど英語だけは別のクラスを受ける児童もいます。それは、特性の違いだと思います。そこを「つまずき」とひとまとめにせずに、丁寧に見てあげる必要があります。

そして今、多文化共生社会が進み、異文化理解や異文化コミュニケーションがとても重要になっています。異なる文化背景や特性を持った児童や生徒を理解する。担任の先生だけでなく、周りの児童や生徒も相互理解しなければ孤立が生まれてしまいます。管理職や地域の理解も必要です。

大学の学部の授業でも、異文化理解関連の科目を教えています。学部生と留学生が発表や議論、グループワークを通じて、異なる文化の理解を学ぶのです。ALTとどのようにティームティーチングをしながら英語の授業を構成するかを学ぶ授業も担当しています。

そして、「異文化理解研究」という科目では、教育現場に多国籍の児童や生徒が増えてくる状況にいかに対応するかを、日本語教育も含めて教えています。教育学部ですから、学生たちも多国籍の児童や生徒への対応は重要だと感じているようで、「他の授業では学べないのでしっかりやっておきたい」と、とても熱心です。

教育学部で教え始めて、異文化コミュニケーションという専門との関わりが深いことが分かり始めました。これまで私自身が学んできたことを、教育学部の学生、院生、そして地域の学校の先生方に還元していければと願っています。（10/11）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第11回　大谷みどり　島根大学教授

異文化の学びを教育に還元する

～異文化理解教育の先駆者たち～

平和は、さまざまな人々との出会いと文化の違いを認め合う姿勢から生まれる

私は研究者タイプではなく、フィールドで実践するタイプです。ですので、島根大学で教え始めて、改めて各分野には専門家の先生方がいらっしゃって、その重要性を実感しました。英語学でも生成文法や語法があり、英語教育学でも評価やスピーキングなど専門は異なります。大学は、専門的に研究されてきた方々から直接、それも集中的に学べる場です。学生の皆さんにはぜひ、この機会を大切にしてほしいですね。

異文化コミュニケーションはさまざまな文化圏の人々との交流が大切です。外国人でなくても、日本各地の地域文化、ジェンダー、世代などさまざまな文化があります。多様な文化に身を置いて、自分のアイデンティティを再確認しながら、いろいろな価値観を学んでいく。全てに賛成する必要などありません。異なる価値を認められるようになる。そのうえで、自分はどうしたいのか、何ができるかを学生時代に考えられるとよいですね。

時代は変わり、AIなどの発達によって高度な翻訳機も登場しています。でも、違いを認め合って理解する心、非言語の理解、そして心情の部分の理解は翻訳機には不可能です。人と人の交流の部分は、決して機械に置き換わるものではありません。

異文化コミュニケーションは頭だけで学ぶものではないと感じています。学校の先生方から、「英語はいやだ、英語はいらん」と言う児童がいると聞きます。でも、その子はサッカーが大好きで、将来はブラジルでプレーしたいと言っている。自分の好きなことを極めていくと、日本だけにはとどまらない。外国語を学び、それを駆使していろんな人とつながれる。子どもたちがそんな夢を持ってくれるといいですね。

その必要性を大人が感じさせられるかが重要です。それこそが、神田外語の卒業生たちができることです。そして、さまざまな人と出会い、文化の違いを認め合う姿勢こそが平和へとつながると信じています。（11/11）

大谷みどり（おおたにみどり）
昭和31年（1956）年8月生まれ。高校までを大阪府豊中市で過ごし、昭和50（1975）年4月に京都大学薬学部に入学。卒業後、雑誌記者を経て、米国に留学。ミネソタ大学ツインシティー校で異文化コミュニケーションと出合い、修士号を取得。昭和61（1986）年5月、佐野学園異文化コミュニケーション研究所の研究員に就任。黎明（れいめい）期の異文研を専門知識と実務面から支える。その後、アメリカン大学へ２度留学し、平成16（2004）年8月に博士号を取得。帰国後は、島根県松江市に拠点を移し、平成20（2008）年7月、島根大学教育学部特任教授に就任。現在は同大学の教育学研究科教職大学院の教授として異文化理解などの科目を担当するとともに、地域の学校における英語教育や異文化適応教育の課題解決に尽力している。近著に『特別支援教育の視点でどの子も学びやすい小学校英語の授業づくり』（明治図書、2020年4月）がある。